

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	不良少女：創作
Author(s)	中井，正文
Citation	龍南， 2 2 1： 2 3 - 4 5
Issue date	1932-03-01
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7055
Right	

不良少女

文二乙 中 井 正 文

1

百合江は溶暗の世界に立ちつくして居た。彼女は現在自分の居る部屋も周囲に並んで居る人々も、どうかすると意識の遠い彼方に消えて行つて唯一人冬枯した薄暮の荒野の真中を彷徨して居るやうな心持がしてならなかつた。彼女の肉体を包んで居る生しい現實の銳角が阿片を吸ひつくした人のやうな百合江の感覺にはほんの僅かなカスリ傷をも與へなかつたやうに思へるのだつた。百合江は周囲の人々のはちきれるやうな緊張を肌感じて、その氣分にちつともなづめない自分が全く取り残されたかのやうに寂しく思はれて來るのだが、彼女はその責任を彼女自身の上にも、今彼女の目前で最後の弱い呼吸をして居る井上との愛情の上にも歸したいとは少しも思つて居なかつた。

「――凡べて人間のすなほな心のまゝに」と云ふ、格言のやうに彼女の柔い心の底に全く無意識に、殆んど彼女自身も氣付かない程薄く浮び上る無形の文字の一連に彼女の今の態度はこよなくふさはしいものであつたが、それは彼女の感覺では全くわからない所のものだつた。彼女はもつと浅い感情から唯そんな彼女を寂しく思ひながら、井上にすまないと云ふ氣持のみが彼女に一時期的な焦燥を強いるのだつた。

ストーブは適度に焚かれて居たが彼女は衣服を透して冷却を幽かに感じるのだつた。しかし彼女はその原因を外部に追及しないで冬枯した薄暮の荒野の真中を彷徨して居る自分を夢見て居るのだつた。曇り日の故だらうか、部屋に居る人々の暗然たる状

默の故だらうか少し早目に薄暮の暗い沈んだ空氣が部屋の中に忍び込んで居た。そしてその溶暗が先刻まで百合江が無心に凝視して居た壁の洋畫を軟く蔽ふて居た。その畫は畫家の井上が元氣だつた頃郊外の丘の中腹の彼のアトリエで百合江を側に置いて最後のタツチを入れた畫だつた。彼はいつも、この畫は自分自身の爲に死物狂ひで描かれた傑作だと口癖のやうに彼女に語つて居た。それは黄昏の荒野の畫だつた。その荒野の眞中に立つて居る影のやうに心細い點景は彼自身だと彼女に語つたのだが、しかしその時の彼女には彼の感情は全く理解出来ないことだつた。

井上は眞剣に百合江を愛して居た。しかし百合江が井上に感じた愛情の隅の微細な空隙すらも彼女の感じ易い心には大きな障礙物として反映して、井上が彼女を愛すれば愛する程彼女の誠實は苦難の十字架を負つたやうに重量を感じるのだつた。

「——御臨終のやうです……」

温味のあるドクトルの聲に百合江は愕然と醫者の存在と藥品の匂ひと、井上の細い手に握られた自分の左手とを意識するのだつた。

彼女の鈍い網膜は靜かに酸素吸入器のガラス管を離す白い若い看護婦と重々しく動搖し始めた人々の氣配を映すのだつた。

風が吹いて居るのだ。彼の畫の中の薄暮の荒野を吹く冷い木枯の音ではあるまいか。それは人々の抑へられた忍び泣きの聲なのだ。その泣き聲は現實と夢幻との境に遊離して居た百合江の神經に針のやうに鋭くつきさゝつて、彼女はよろ／＼と眩暈に似た發作を感じながら唇を噛みしめるのだつた。しかし頬を傳る涙の温度はやがて彼女に消え去る者のやうに儚い餘裕を與へるのだつた。その餘裕はこの切實な現實を薄いベールで包んで彼女の激發した一時の昂奮を容易に靜めるのだつた。この心理的過程は百合江の肉体を流れる特殊な血液の故のやうに思へるのだつた。その血液は瞬間でもごく自然に、彼女の全く意識せぬ間に彼女の感情を色々と變へるやうに思はれた。百合江を或る人々には、仕様のない不良少女か、恐ろしい惡魔のやうに思はせるのもこの特殊の血液の責任のやうに思はれるのだつた。

百合江は自分に注がれた視線が異口同音に死んで行つた男の戀人である彼女を憐れんで、無言の慰めの言葉を囁いて居ること

をはつきりと皮膚に感じて居た。

井上は死んで行つたのだ。最後の瞬間まで彼女を愛しながら。百合江は今桃色のシェードを透して流れる電燈の光を鈍く反射して居る井上のベットの冷たい金囃を瞞めながら、井上との今迄の交渉を全く異つた世界の事件のやうに少しも昂奮することなく反省することが出来た。それは純粹のプラトニック・ラブであつた。唯一度危機があつた。丘のガラス天井の井上のアトリエで彼女は半裸体で井上の畫架の前に立つたことがあつた。アトリエの側に立つて居る潤葉樹の葉の影を眞晝の太陽はガラス越しに彼女の桃色の裸体の上に焼きつけた。風が吹く度にその淡い影はチラチラと顫へた。あまりの靜寂さに恍惚として百合江は井上のモデルになつて居ることを忘れて唯その時の自分の裸体の美しさを他人の肉体を鑑賞する時のやうに見とれて居た。百合江はその時の昂奮を覚えて居る。現在はその彼女の日記の一頁に挿入された凋んだ一片の花に過ぎなかつたが、井上は氣の小さな感情の細い青年だつたが、百合江はその時の井上に逞しい男性の壓迫を意識するのだつた。百合江は本能的にそして無意識に落ちついて衣服を附けて居る自分を發見するのだつた。井上は百合江のあまりに冷靜な感情を悟るとそれ以上どうすることも出来なかつた。彼女は時々井上にすまないことをしたと氣の毒に思つたこともあつた。

——そんな心の餘裕は百合江から涙を奪ひ取つた。百合江は早くこの部屋を出てしまひたいと思つた。彼女は自分が異端者のやうに思はれてこの部屋の空氣にそはなないことを知つたからだつた。それは矢張彼女が裏側の心で死んだ井上に對してすまないと云ふ氣持が強く働いたからだつたかもしれないなかつた。一体に百合江は感情がひどく細かい割合に、自分の周囲の大きな事件の中では世の中をよく知つた人のやうに冷淡な性質ではあつたが、彼女は井上の爲に泣くことの出来ないことが不思議でもあり寂しく感ぜられるのだつた。

百合江はカメラの前の映畫女優のやうに落ち着いて井上の枕許に立つた。そして彼女は井上の乾いた唇に接吻をしてやるのだつた。井上の唇は虫歯の匂ひがしたやうな氣がした。彼女はふと氣附いて手に持つて居た半ば涙に濡れたハンカチを井上の顔の上に擴げると、黙つて流れるやうに扉へ急いだ。その時急に高まつた井上の母親の泣聲に混つて誰か自分の名前を呼んで居るの

を聞くと、彼女は冷い廊下で一層速度を早めるのだった。

戸外は寒かった。先刻のは矢張外を吹く風の音だったのであらうか、冷い冬のからつ風が彼女の上氣した顔を殴りつけた。彼女は放心して唯暗い夜の舗道を歩いた。彼女の頭の中には井上のことも彼の死のこともなかった。

百合江はいつの間にか行きつけの喫茶店の前まで来て居た。放心が長い距離を歩かせるのだった。彼女は夢中でガラスの扉を肩で押して中に這入った。店が閑散なのを知ると彼女は初めて吾にかへつたやうにほつとするのだった。ストロブの側では小説家の阿部が一人ぼつちで珈琲をすゝりながら新聞を讀んで居た。阿部は百合江の方を振向いた。

「悲しみは人を美しくしますね」

阿部は獨言のやうに呟いた。百合江は黙つて微笑んで見せた。阿部の目にはそれがとても寂しく可憐に映つたのだ。

「貴方が今晚ほど美しく見えたことはありません」

「阿部さん。なにか靜かなレコード選んで下さらない？ 寂しい音樂よ！」

「井上君はどうとう死にましたか？」

「えい、井上さんはとうとう死んでしまつたの……」

百合江は同じことを答へると黙り込むのだつた。百合江はうつかり膝にこぼしたホット、レモンの汁を拭ふためハンカチを探した。彼女はそれを井上の顔の上に置いて來たのだが、どうしてかそのことが彼女には思ひ出せなかつた。彼女は阿部の差し出した薄緑のハンカチを素直に受け取つた。そしてもう一度寂しく微笑んで見せるのだつた。阿部はふと千人の女の魂と肉体を持つた女と云ふアンナ・ステンの廣告文を聯想するのだつた。

その日百合江が會つたのは竹田と云ふK大學の學生であつた。二人はスタンドに座つて居た。その日は風もなく小春日和のや

うに麗らかな天氣だつたので、スタンドは都會の男女達に埋められて居た。多くの人は熱狂せんが爲に熱狂するのだつた。東西對抗ラグビー選手權大會の日であつた。試合はクライマックスだつた。東軍のスリ・クォーターが巧みに敵のタツクルを避けながら素晴らしい速度で百合江達の前を走り過ぎた。観衆の嵐のやうな歡聲の中で彼女は思はず眩くのだつた。

「北川さん！ 北川さんきつとトライするわ。そらきつと……」

竹田はプログラムを見返しながら怪訝そうな顔をして百合江に囁くのだつた。

「——あれは僕らの學校の選手で塚田つて云ふ男ですよ。決して北川ではないんです」

百合江は竹田の言つた言葉が聞えなかつたやうな風をしてトライした青年に拍手を送りながら、過去と現在の錯綜した妙な氣分に襲はれるのだつた。

「——あたしどうかしてる。北川さんはアメリカに居らつしやるんだわ。ほんとうに變なこと言つちやつた。」しかしそのことは彼女に一ヶ月ばかり以前に受け取つた北川の手紙を思ひ出させるのだつた。それには二月五日着のエンプレス・オブ・アジア號で日本に歸々と書いてあつたのだつた。百合江は北川のその手紙を忘れて居たことが不思議に思はれて來るのだつた。すると彼女は試合のことなどは忘れてしまつて北川のこと頭の中がいつぱいになつて來るのだつた。

北川は百合江の亡くなつた兄の親友で彼女が最も長い交渉を持つた青年だつた。北川はラグビーの選手だつた。北川は屢々彼女の家へ遊びに來ることがあつたし、百合江も時々兄に伴はれて又單獨で北川の下宿を訪問することがあつた。百合江は何時の間にか北川に氣付かれないやうに、そして自分自身でもはつきり氣付かないやうに北川に愛を覺え始めて居た。しかし北川はその頃の百合江の氣持を心の中では知つて居た。彼ははつきりと自分が百合江を戀して居ることを知つて居たから。悲劇はいつもそんな平凡な顔をして登場するものだつた。

百合江は最初の中こそ北川の側に居ると頗が熱くなつて來たり呼吸が苦しくなつて來たりして平凡な世間話すら語ることが出

來ず、自分の取り亂した外觀をつくらふとすればする程一層無器用になる自分を腹立たしいと感ずることもあつたが、次第に彼女が北川の感情を彼女の細い感情で觸れることに馴れて來ると、彼女はかへつて北川が慌て始める程冷靜な女になつて來て、その冷靜な感情が今度はかへつて北川に好意を見せたり自分の愛を會話の中に暗々に含ませたりすることを芝居氣が多くて滑稽なやうに思はせて遂にあまりに長い交渉の期間北川は百合江が路傍の人のやうに冷く感ぜられ二人の間には誤解が間隙を作るのだつた。百合江の嘘の氣持がそのやうに北川に反映して來ると北川は田舎の小地主の息子が突然彼女の母に結婚を申し込むのは僭越のやうな氣がして、殊に彼の親友であつた彼女の兄が死んだ後は全く細い望みの綱が絶ち斷れたやうに失望を感じて、百合江に會ふことを切望しながら彼女の家を訪問するのが難しくなるのだつた。

百合江の場合も同じだつた。彼女は今迄とは變つた北川のよそよそしい冷い態度に氣付くと北川と一緒に居る時間が氣不味く息苦しいのでふと鋪道で會ふことがあつても心ならずもわざと氣付かぬ風を裝ふのだつた。そんな時決して北川が聲をかけることはなかつた。その後で百合江は寂しくなつて自分の態度を後悔した北川の無關心な態度を怨むやうな心持に沈むのだつた。百合江は北川のそんな態度が全く自分の責任であるとは少しも知らなかつた。それは唯百合江の新しい肉体の中に潜む古風な純情がそうさせるのだつた。

北川は大學を卒業するとアメリカのP映畫會社の日本支社に入社した。そしてこの一年間アメリカへ行つて居たのだつた。その長い間北川からは唯二度しか便りがなかつた。その時彼が送つて呉れたシルビヤ・シドニーのポートレートを百合江は自分の部屋の壁に掲げて置いた。北川は百合江のやうに美しい娘はもう結婚の相手が内定してゐるだらうと思つたのでわざと度々通信することを遠慮したのだつたが、北川のそんな心づかひを知らない百合江は自分勝手に北川の薄情を怨むことさへあるのだつた。それは悲劇だつた。北川と百合江は心の中では強く愛し合ひながら、お互ひに相手の心持は少しく反映させないで二人は別々の感情に焦燥して居るのだつた。

——百合江は北川のことを忘れて居たことについて自身に憤りを感じるのでつた。私は是非二月五日には港へ行かなければな

らぬ。百合江は強くさう決心した。

竹田が百合江を促した。試合は概に終つて居た。百合江はぼんやりと北川のことを考へて居たのだつた。二人は肩を並べて歩き出した。竹田は途中昂奮して色々と選手や試合の批評をしたが、彼女は後半は注意して居なかつたので言葉少くなに唯點頭いて見せるばかりだつた。

二人は暫時雑踏してゐる鋪道を歩いた。とある洋品店の飾窓が百合江の視線を惹き付けた。彼女は高い鼻をガラス窓にくつく程近づけて中を覗き込んだ。中には澤山の毛皮の襟巻が陳列してあつた。彼女ははつきりと側の定價表を讀んだ。(ホワイト・フォックス、二百圓。)百合江はそのまゝ素直に歩き出した。自分の慾望を全く忘れ果て、しまつたやうに。

「あたし香水が買ひたいんだけどつきあつて呉れる？」

お互に黙り込んで大分歩いた後百合江は忘れてゐたことを思ひ出したやうに快活に囁いた。

「あゝ、喜んで——」

竹田は嬉しそうに微笑んで見せた。百合江はさつさと一軒の化粧品店の廻轉ドアを押した。百合江の前の臺に若い店員は十個ばかりの香水瓶を並べた。

「あたし困つちやつた。あたし香水はきまつてないの、あんたどれが良いかしら？」

竹田は顔を赤らめてどぎまぎした。彼は香水には全く知識を持たなかつたのだ。百合江の美しい顔が意地悪く覗き込むので、彼は慌てゝ水色のリボンのついた美しい瓶を取り上げた。

「ちあそれにきめるわ！」

竹田は彼女があまりに簡単に決めたので豆鐵砲をくつた鳩のやうな目で百合江を見返した。竹田はその香水は餘りに香りが強

過ぎるやうな氣がしたので百合江のやうな女には相應はしくないと思つたが、今更口に出して注意を促す勇氣が起らなかった。彼はふと港の淫賣婦の肌を聯想した。

電車の交叉點まで辿り着いた時竹田はおづおづしながら恥かしそうに嘯くのだつた。

「僕の好きなカフェで貴方を見たいんですが——」

「あたしなんかとても駄目よ。とても野暮なんだから」

百合江があまりに運つ葉に勘らかに言つたので竹田はたじししながら不用意に言つた自分の言葉を後悔するのだつた。だが彼はその瞬間百合江の嬌笑に新鮮な魅力を感じたのだつた。すると百合江が非常に複雑な性格を持つた女のやうに思はれて來て到底彼女は彼より遙かに異つた世界に住んで居る人のやうな氣がして自分との間に中絶された遠い距離を感じるのだつた。

混雜して居る喫茶店のボックスで百合江はちつともケーキに食慾を感じなかつた。彼女は竹田のシガレット・ケースからコルクロを一本取り出して啣へて見た。竹田が珈琲を飲み干すと彼女は快活に立ち上つて無理矢理に彼女は小さなバスから銀貨を取り出して勘定臺の上に置いた。外に出ると彼女は丁度通りかゝつたバスに女學生のやうに飛び乗つて、微笑みながら水兵のするやうに竹田に敬禮して見せた。竹田は呆然としながらガソリンの匂ひの中に立つて居た。彼はチラツと百合江の白い脂肪色の素足を見たやうな氣がした。

「あの女の心はちつともわからない！　だがどんな男でも彼女を見ると直ぐ戀してしまふらしい」

竹田はオーバアの襟を立てながら吐き出すやうに獨言を言ひつゝマツチを擦つた。

3

二月五日午後三時。北川の乗つて居るエンプレス・オブ・アジア號が着く時刻だつた。百合江は迎へる人々の混雜の中に隠れて居た。彼女は今日は珍らしく洋装だつた。青色のベレーと胸のあたりでバンドをきりゝと締めた紺色のオーバアは彼女を十六七

才の少女に見せるのだつた。彼女は複雑な感情に小さな胸を顫はしながら汽船の巨大な船体を睨めて居た。

いつの間にかその巨大な船体の黒色がぼやけて来て雨雲のやうに彼女の視界を蔽ふてしまふと、彼女は突然軽い卒倒の氣配を感じた。

その時男の腕が彼女の身体を支へるやうに背後から彼女の肩を掴んだ。百合江は驚いて振り返ると小説家の阿部がにやにや笑ひながらソフトの縁にちよつと手をかけた。

「誰か迎へにいらつしやつたんですか？」

「いゝえ！ 巨きな船の着くところを一度見てきたかつたものですから。ほんの氣まぐれよ！」

百合江はつい見え透いた嘘をついてしまつた。そして優しく甘へるやうに微笑んで見せるのだつた。嘘をつく必要の全く無いのに、彼女はどうしてそんな出まかせな嘘をついてしまつたのかわからなかつた。

「——仲々詩人ですね」

阿部の落ち付いた聲が百合江には皮肉に響くのだつた。

「貴方は？ 誰かお迎へ？」

「僕ですか。えゝ、ちよつと——。だが遇はなくても良いんですよ」

百合江は阿部が慌てゝ居るのが可笑しく思はれた。この人だつて慌てる必要の全く無いのにひどく慌てゝ居るんだ。百合江はふと北川を思ひ出した。阿部さんも北川を迎へて來てゐるのではないかしら、いやきつとそうだわ。

百合江は樂な氣持になつて阿部の肩越しに長い海洋の旅を終へて元氣そうに降りて來る船客をほんやり眺めながら、彼らが迎へる群衆の中に意氣揚々と這入つて行くと、あちらこちらのグループから低いながら朗らかな歡聲が湧き上るのを微笑みつゝ聴いて居た。

ふと彼女は周圍の人々は皆汽船の昇降口の方へ流れて行つて、自分と阿部とが取り殘されて居るのを發見すると、ぼんやり港

のあらゆる方向を瞞めて居る阿部の視線を追つたが、悪戯そうに阿部を促して群集の中へと這入つて行つた。

百合江が人々の背後まで辿りついて何の氣なしに背伸びして昇降口を眺めた時彼女の神経は激しく揺られて急に現實に引きもどされた自分の緊張に身顫ひするのだつた。

以前と變らぬ北川が小さなトランクを持つて悠々と降りて來るのだつた。意地悪く微笑んで彼女の視線を追ふて居る阿部の澄んだ眼を頗る感じてゐる百合江は北川が最後に彼の母らしい人と數人友人達と赤い和服を着た若い女とのグループに包まれるまで凝視して居た。

百合江はどうしても北川の所まで近づくと勇氣がなかつた。彼女は阿部の肩に隠れて赤い和装の女を瞞めて居ると北川が結婚する女のやうな豫感がして重い渾身のやうなものが胸に溜るのを感じるのでつた。彼女は今は平靜に反省することが出來た。彼女はすなほにその感情を嫉妬だと考へた。矢張り北川に愛情を感じて居ると云ふことのみが百合江の沈んだ心に朗らかな春風を吹き送るのでつた。

百合江は甘へるやうに下から阿部を仰いで見た。阿部はその時の百合江の心理状態がわかつたやうな氣がしな。そして彼は百合江に可憐な妹に對する愛情を覺えるのだつた。彼は今の百合江にとつて最良であると信じた方法に従つて靜かに百合江の肩を抱くと軟く反對の方向に向けてゆつくりと歩き初めたのだつた。

百合江は從順に彼の行動に従つた。その時阿部は百合江に浮世の風を知らない少女を感じるのだつた。歡喜に酔つて居る人々から遠ざかるに連れて彼女は心の憂鬱とは正反對に快活に振舞ひ初めるのだつた。阿部は別の意味で彼女の猫の眼のやうに變りゆく心理状態に新しい興味を感じたが、それは決して多くの男を知つた女の意識的な技巧とは全く異つた、寧ろ異性を完全に認識しない成長期の少女に屢々發見する理性とか教養とかに少しも制限されない奔放な無意識の技巧のやうに思へるのだつた。そして今更のやうに殆んど成熟した百合江の肉体に唯一ヶ所の未完成な弱點を持つた精神がこもつて居る矛盾を感じるのでつた。その弱點は僅かな經驗が暗示で完成するものゝやうに思へるのだがそれが完成して一人の「女」が誕生することは百合江の持つ

あらゆる魅方を減殺してしまふことなのだ。百合江が第三者から仕様のない不良少女とみなされたり、非常に複雑な性格を持つた女と思はれるのも凡べてこの簡單な原因に發してゐるのだと阿部は小説家のデリケートな神経で感ずるのだつた。阿部は百合江に純情な天使を見るのだつた。そして男性に對してあまりに弱々しい女を。

4

その翌日北川が南郷家を訪問したことは百合江の心をひどく軽くした。彼女は嘗つて北川を何とも思つて居なかつたかのやうに少しもわだかまりなく朗らかに話すことが出来るのだつた。

百合江は子供のやうにはしやいで自分で北川の爲に珈琲やお菓子の用意をしてやるのだつた。しかし彼女のそんな動作は昨日港に百合江の姿を發見することが出来なかつたことも思ひ出されて、一層北川に物足りない寂しさを感じさせるのだつた。百合江は北川と相對して居る間は花のやうに微笑んで見せた。

百合江は昨日のことについては、眞實のことも嘘の辯解もしなくなつたのであるべく觸れないやうにして居た。百合江がまだ結婚して居なかつたことは彼を安心させ同時に別の意味で不安にするのだつた。百合江は北川の日に焼けた元氣そうな顔を見て居ると赤い着物の若い女の姿が頭の中でチラチラして仕方がなかつた。北川は無邪氣な少女と話してる時のやうにアメリカの土産話を饒舌にユーモラスに語つて聞かせる程だつた。その度に百合江は必要以上に笑つて見せるのだつた。しかし軽い氣持で話して居る二人はふとお互ひにかへつて距離を感じて物足りなくなり初めるのだつた。二人の感情に就いては何も知らない南郷夫人は娘の快活さを信じきつて安心して二人だけにその部屋を任かすのだつた。北川も百合江も假面があまりに容易に且つ器用にお互ひの眞實の顔を包んでしまつたことには氣付かないので次第に二人の別々の不満は部屋の空氣を重苦しくし初めるのだつた。

「——度々お便り上げようとは思つたんですけど——」

不良少女

「いゝのよー 貴方の心持わがつてるわ」

北川が暫時話の途切れた後言ひ憎くそうに語り出した時、彼女は慌てゝ制するのだつた。それは北川にとつて意外に思へるのだつた。北川は百合江の心が増々理解し難くなつて来るのだつた。

北川と向ひ合つて居る間は北川に對する愛情は少しも意識はしなかつたのだが、北川が歸つて行くと百合江はひどく北川が懐かしくなつて来るのだつた。百合江は北川の掛けて居た椅子に一人腰かけてぼんやりと部屋の中を眺めて居ると急に自分の周圍が眞空になつたやうに思はれて来るのだつた。

(私やはり北川さんを愛してるのかしら?) 百合江にはどうしても戀愛の氣持がはつきりわからなかつた。このまゝでは自分には到底熱烈な戀愛なんか出来そうにもないと思はれて来るのだつた。百合江は温室の花のやうに人生の美しい物のみを眺めて成長したのだつた。だから彼女の純情はいつも異性を見る時認識不足の色眼鏡を掛けさせられるやうに思へるのだつた。

彼女は北川を愛することがひどく手数がかゝつて難かしいことのやうに感ぜられた。彼女は相手の、殊に能動的な男性の感情を少しも計算に入れて居なかつたことに氣付かないのだつた。

冬には珍らしい絹糸のやうに細い雨が降つたり止んだりした。雨が降り止むと霧が都會の夜の街路樹をしつとりと包んでアスファルトの舗道とすれすれになる迄冷いベールを垂らすのだつた。往來する自動車のヘッド・ライトも毒々しいネオン・サインも今晩だけは軟く溶けて流れるのだつた。

百合江は北川に凭り添つてあてもなく歩き續けた。北川がいくら夜霧は毒だから温いストープのある喫茶店へ這入ると誘つても彼女は頭を横に振るばかりだつた。北川は百合江が彼女の瀟洒な肩から滑り落ちそうになつて居る白いシヨールに氣付かないのを發見すると引き上げてやりながら今晩彼女が昂奮してるやうだと考へるのだつた。百合江は雨の降る晩とか霧の降る夜とかいたまらなく好きだつた。そんな晩は百合江にとつて鎮靜劑であり又靜かに反省出来る晩であつた。

二人は歩み疲れて這入つた或るデパートの地下室の喫茶店で温いコ、アを飲むとエレベーターに乗つて三階に上つた。百合江

はこのデパートでは三階が最も好きだったのだ。三階には化粧品や手袋やハンドバッグやショールやハンカチ等が飾つてあつた。百合江は平常より心持閑散な人々の流れに乗つて遊びで行つた。百合江はガラス越しに暫時香水瓶の飾窓を眺めて居たがチラツと北川に微笑んで見せると再び先に立つて歩き初めた。瞬間北川は百合江が無邪氣な少女か妹のやうに見えた。

百合江はハンドバッグの陳列棚の前を離れなかつた。彼女は香水よりバッグの方が永久的だと考へた。彼女はゆつくりと定價表を見て廻つた。そしてなるべく安いのを探した。それから彼女は北川の方を振り向いて優しい微笑を投げると囁くのだつた。

「貴方！あのバッグ買つて下さらない？」

北川は豫期しない百合江の言葉に面喰つてどぎまぎしながら百合江の顔を覗めた。彼の瞳には人妻のやうに落ち着いた百合江の瞳が映るのだつた。百合江はその時眞剣さのあまり身体中の筋肉が顫へるのを感じた。北川は百合江の氣持が理解出来なかつたけれどその時若い妻に對する信頼すべき夫の感情を自分に感じて今更のやうにこみ上る嬉しさを感じるのだつた。しかし北川は彼女の指定した品物があまりに粗末で彼女に不相應なのを發見すると慌てゝ囁くのだつた。その言葉は無意識に妻に對する夫の言葉になつて居た。

「もつと良いのを買つた方がいゝよー」

「いゝえ、いゝの。これが良いの！」

百合江はどうしても聞き入れなかつた。その時の百合江の氣持は唯北川から贈物として永久に保存出来る物が貰ひたかつたのだつた。彼女はバッグ自身はちつとも欲しくはなかつたのだ。唯それによつて例へ一瞬でも北川に新妻のやうに甘くねだつて見たい衝動に驅られたのだつた。その心持は北川には充分にわからなかつたが北川は急に百合江との間の距離が短縮されたのを感じて意識的に彼女に調子を合せて夫らしく振舞ふことに新しい興味を感じるのだつた。

だから彼女が突然何處か靜かなカフェへ案内して呉れと言ひ出した時北川は格別驚かなかつた。先刻デパートで女店員が包みを差し出す時「奥様お待せ致しました」と云つた言葉が北川の耳に快くこびり着いて居た。彼は百合江に戀人以上の親しさを感じ

で意氣揚々と或るバアの二階の特別室へ彼女を導くのだつた。

二人の間に距離が消えてしまつたと云ふ感じが容易に北川に強い洋酒を飲ませるのだつた。そして酔つたことが一層北川を勇敢にするのだつた。その爲に北川は彼女がハラハラする程液体を飲み續けた。薄暗い部屋的光線の中で腕時計が十時を指して居るのがぼんやり見えた。百合江は少くも不安を感じなかつた。唯軽い精神的の疲勞を感じて居るやうに思へた。百合江はうつとりとソファに凭つて階下の酒場の喧騒を遠い子守唄のやうに聽いて居るとこのまゝ靜かに眠り込むやうな氣がする程だつた。

北川はそつと百合江の軟い肩を抱いた。百合江は眠つた人のやうに睫毛一本顫はさなかつた。しかし最後に彼女の固く閉ぢられた眼が北川の熱つぽい唇を身近く意識した時百合江は無意識に軽く北川の手を拂つて靜かに立ち上つた。そして窓を開いて北川の方を振り返ると何事もなかつたやうに言ふのだつた。自分でも不思議に思へる程冷靜に。

「北川さん！こんなに霧が深いのよ。ご覧なさいね、街中が乳色をしてゐるのよ！」

その時の彼女には自分の行動を反省するやうな餘裕も勿論北川の心を理解してやる程の冷靜さもなかつたのだ。しかし彼女はわけのわからない冷い影が背中を匍ひ廻るのを感じた。

北川は百合江に翻弄されたやうな氣がするのだつたが次の瞬間には自分が道化師のやうにみじめに思はれて來て憤る力を根こそぎ奪はれたやうな氣がするのだつた。

お互ひに相手の顔を直視出来ない程の氣不味い空氣が先刻彼女が窓を開いた時冷たい霧と一緒に流れ込んで來たかのやうに二人の間に流れ漂ひ始めた。

「貴方の心がわからない！」

北川は深い溜息の中から言ふのだつた。北川の言葉は軟い百合江の心臓を深く切りつけた。彼女は接吻すら拒んだその時の自分がたまたまなく腹立たしくなつて來るのだつた。

「あたしにもわからないの！」

百合江は強く嘯くと頂垂れた。沈黙がたまらなく百合江には恐ろしかった。そして思はず口走るのだつた。

「あたし近い内結婚するつもりなの。」

言ひ終つて百合江はやうやく自分が言つた言葉の内容に氣付いて、どうしてそんな恐ろしい出まかせの嘘をついたのかと思ひ返す餘裕もなく慄然と身を震はせた。二重の苦痛が彼女の首を締めつけた。

彼女の不用意な一言は北川にとつて少くとも致命的だつた。

「——では僕も近い内結婚します！」

北川は昂奮のあまり何を叫んだのかわからない程だつた。しかし百合江には彼女のとてもない嘘が大きな反響となつて歸つて來たのだ。結婚。赤い着物の女。赤。彼女の視界に血のやうに眞紅の色が擴がつたと思ふと彼女は激しい卒倒を感じた。

百合江は北川に挨拶もしないで夢中で部屋の外に出た。その時北川が何か叫んだやうな氣がした。彼女は聽き分けることが出来なかつた。タクシーに乗つてから初めて百合江は少しは自分を反省することが出来た。自分の裏側の心がいつも自分の意志に叛いて自分を不幸へと導くやうに努力して居るやうな氣がしたが、彼女にはその正体は到底判らなかつた。唯自分自身が腹立たしくてクツシヨンに泣き伏してしまふのだつた。

百合江は北川と長い散歩をした晩風邪をひいてしまつたのだつた。百合江が自分の部屋に這入つて何の氣なしに鏡を覗いた時あまりに頬が赤いので初めて自分の上昇した体温を知つた。百合江の昂奮が今迄ちつともそれを百合江に氣附かさなかつたのだ。百合江は今晚北川に示した自分の不都合な行爲は凡べて自分の氣づかなかつた發熱の爲だと簡単に自分に思ひ込ませるのだつた。しかし彼女は北川に手紙でお詫びしなければならぬやうな氣がしたのでデスクに向つたのだが全く頭が混亂して遂に三枚を反故にした後彼女は其の考へを餘儀なく棄てゝしまつた。いつそのこと思ひ切つて直接北川に遇ふ方が良いのだと百合江は考へた。

その晩から百合江はベッドから起き上がることが出来なかつた。体温が卅九度に昇つたこともあつた。醫者が肺炎になる恐れがあると云つたので、南郷夫人は唯一人の娘の爲に夜眠らないで介抱した。

百合江が殆んど毎日姿を現はした喫茶店は相不變常連の人々によつて占領されて居た。

急に百合江が姿を見せなくなると人々は今更のやうに彼女の美貌や長所に氣付いて彼女を除外してのその喫茶店に空虚を感じ初めて、唯彼女を話題に連れ出すことによつて自分を慰めるのだつた。人々の中には彼女が結婚したのだと眞實らしく語つて人々に軽い失望を與へたこともあつたが、やがて彼女が病氣で靜養して居ると云ふことが知れ渡ると氣の早い唐田男爵などは早速百合江に見舞品を送らうと提議して人々の喝采を得た程だつた。

この喫茶店では人が二人以上集まれば必ず百合江の噂が話題の中心だつた。この喫茶店の常連は畫家とか小説家とか一般に上層の知識階級の人々が多かつたが、それでも百合江を良く理解して居る數人を除いては、世間の人々と同様彼女を不良少女だと信じて居た。彼等の大部分は軽いサディストのやうに、彼女を非難することによつて快樂を感じ又彼女に興味以上のものを感じるやうに思はれるのだつた。

勿論百合江の噂と云つても彼等は婉曲に決して他人に下品と輕蔑されないやうに、自分の彼女への關心を相手に見透かされないやうに話すのだつた。彼等が屢々百合江に冠した不良少女と言ふ言葉にしても唯彼等がその言葉自身に魅力を感じて居たから屢々百合江の場合に用ひただけで、決して彼等が美しい彼女を世間の俗人のやうに輕蔑する筈がなかつた。彼等は百合江の私行に就いては案外小さい事件まで注意して知つて居た。

例へば誰か「彼女はいつかK氏と一緒にシネマを見て居た」と云ひ出すと、直ぐに他の人々が續いて云ひ出すのだつた。

百合江の夫になる人は誰だらうかと云ふ話題も喫茶店で退屈な時間を賑はす爲に彼等は好んでしたのだつた。

「――僕はスポーツマンの 氏だと思ふよ」

「いや、百万長者のS君だ」

「——K男爵の令息さ。何故なら……」

彼等はなるべく社會的地位のある紳士達を數へ上げてせめて自分達の空しい心を諦めさせようとするのだつた。そんな時小説家の阿部は最後に自信ありそうに皮肉に附け加へるのだつた。

「案外に彼女の夫は地位も名聲もない平凡な男だと思ふよ。」

その時彼は港で遇つた時の百合江を思ひ出して北川のことを考へて居るのだつた。

色々と百合江に關する興味あるエピソードも有つた。或る晩二人の青年が珈琲を飲みながら百合江の惡口を言つて居た。彼等が勘定を拂つて外に出て行くと隣りのボックスに居た頑丈な上半身を持つた學生が飛び出していきなり一人を蹴り倒した。起き上つて躍りかゝらうとする青年を他の青年は慌てゝ引き止めた。

「駄目だ！ フライ・ウエイトのWだ」

「彼奴も百合江に失戀した一人なんだぜ」

悠々と喫茶店の扉の向ふに消えて行くWの後姿を見送りながら彼等は冷に笑ひを洩らした。

若い唐田男爵がいつか酒に酔つてしんみりと述懐したことがあつた。

「僕は生涯あんなに魅力ある美しい女に遇ふことは出來ないだらう！」

それで人々は初めて唐田の失戀事件を知ることが出來た。

朗らかに晴れ渡つた午後百合江は喫茶店の冷い大理石のテーブルに凭つてゆつくりとボスタムを飲んで居た。それは百合江が

病氣になつてから二週間位後のことだつた。百合江は心持瘦せた腕に傳る大理石の冷さを快よく愛撫しながら山中の湖水のやうに平靜な自分の心を愉しんで居た。

それは小春日和のやうに珍らしくよく晴れた天候の故であらうか、久し振りに病室を出て晩冬の市街を散歩した歡びの爲であらうか百合江の心は幼年時代を追想する時のやうに和やかで嬉しかつた。百合江はボスタムを飲み干すとコ、アを註文した。百合江はこの懐かしい喫茶店のボックスでもう一時間位遊んで行かうと決心した。彼女は自分でレコードを選択してターン・テーブルの上に載せた。それは靜かな四重奏曲であつた。百合江はいつのまにか厚いフェルトの草履で寄木細工の床を調子を合せて踏んで居た。

その時だつた。百合江は眠つて居るやうに靜まつた部屋の空氣がかき混ぜられたのを感じた。數人の若い男達の荒々しい聲音が近づいて來て、彼女の隣りのボックスに這入つた。

百合江は久し振りに聽く若い男性の力強い聲に快い軽い昂奮を覺えた。彼女は直ぐその闖入者の中に阿部の特徴のあるバリトンを聽きつけて立ち上つて挨拶に行かうとしたが、直ぐ行くのは惜しいやうな氣がして、彼女は微笑みながら惡戯な子供が隠れて居て突然ワツと跳び出して人を驚かす情景を想像しながら靜かに待つて居た。

百合江は今全く冷靜な氣持で客觀的に異性を眺めることが出來た。遠い世界のものだと考へて居た結婚問題が案外自分の身近かに突然平凡な顔をして現はれるやうな氣がした。それは彼女にとつて恐ろしくも楽しくもなかつた。百合江は自分の冷靜がかけつて寂しく思はれるのだつた。井上、唐田、竹田と彼女は過去の異性ととの接觸を回想して見たが、その回想が彼女の心の湖水に小さな波紋一つ投げないのが彼女にはより一層感傷的に感ぜられるのだつた。私には一生涯戀愛なんて出來ないのかしら。廣い世の中には私の魂と肉体を捧ぐる男の人が一人位居ても良さうなものだと彼女は唯心の表面でそう思つて見るのだつた。

百合江を一番苦しめたものは彼女が眞實に北川を戀してかと云ふ問題だつた。そのために彼女は北川に對して戀人としての一定した態度を保つことが出來ないのだと考へた。北川が彼女を愛してると云ふ氣持は今の百合江には明瞭にわかつたやうな氣が

した。その北川は百合江に一枚の葉書を残したまゝ、目的も告げずに故郷へ歸つて行たきり何の便りもよこさなかつた。北川はいつか彼女に告げた通り結婚するのではあるまいか。百合江の嘘を眞實と思ひこんであの赤い着物を着た娘と。しかしどうしたわけかその懸念は彼女に嫉妬らしい氣持までは起さゝなかつた。近頃の百合江は無意識にクラツシクな諦めの喪服を着けて居たそれは百合江の体内で彼女が知らない間に大きな變化が起りかけて居た爲であつた。話女の心の奥で少女のそれでない。「女」の感情が生れつゝあつたのだ。百合江は遂に出そびれてしまつた。仕方なく彼女は阿部達が出てしまふまで隠れん坊のやうにじつと我慢して居やうと決心した。そのことは彼女に苦痛のやうに思はれ出したので彼女は自分の行爲を後悔し始めた。彼女は側の棚から見古した映畫雜誌を取り下ろして無益なページを繰つて居た。

丁度その時だつた。百合江の懶い耳は阿部の言葉を捕へたのだ。奇蹟が起つたのだ。確かに素晴らしい奇蹟が起つたのだ。

「――南郷百合江つて人はね……」

百合江は初めて自分が隣りの男達の話題の中心になつて居たことを知るのだつた。そして阿部が今何度目かの百合江の批評を語り始めたところだつたのだ。

「つまり彼女は僕達が理解することの出来ない程複雑なデリケートな心を持つて居るんだ。僕はこゝに非常に精巧な複雑な機械を聯想する。若しその機械の一部分が缺陷を持つて居たらどうだらう。きつとその機械は意外な廻轉を始めるかも知れない。

僕は百合江つて人がどうもそんな氣がして仕方がないんだよ。もつとも彼女の場合では缺陷ではなくて、長所なんだ。彼女自身氣付いて居ない美點なのだ。――僕は彼女が餘りに純情を多分に持ち過ぎて居るやうな氣がするのだ。彼女が戀愛に對して人一倍嚴格でその上敏感なのもその爲だと思ふよ。

だから僕は彼女の純情――勿論それは僅かな暗示か經驗で容易に清算されるものだが――が何かの機會で失はれたなら百合江つて女は一人前の成熟した平凡な女となつてしまひなかつたかと恐れてるんだ。」

「百合江を充分に理解しない人々は彼女を男から男へと飛び廻つて居る淫奔な不良少女かあらゆる男性を悩殺する美しい悪魔のやうに思つて居る。それらのことは全く彼女の責任ではないやうな氣がするね。」

あの女を知る程心の美しさに胸をうたれるよ。あの人こそ天使のやうな氣がする。」

「南郷百合江つて女は未だ決して眞剣に男を愛したことはないだらうと僕は思ふよ。彼女は何時も胸の中に理想の男の幻を描いてるんだ。」

彼女の心はいつもその幻影の男を求めて居るのだよ。だから彼女は今迄幾人もの男と交際して失望していつのまにか別れてしまつたのだ。世間の人々が騒ぎ立てるほど、彼女は無情な女でも怒らしい悪魔でもないのだよ。唯純情の所爲なのだ。」

「――要するに彼女は今「女」に成りつゝある少女なのだよ。人々は唯彼女の成熟した肉体のみを見て、あまりに軟い彼女の心に氣付かないものだからとんでもない誤解をするのだ。今の彼女は唯彼女の素直な心のまゝに動作してこそ祝福すべきだと思ふね。固苦しい理性とか男性觀とかを彼女に要求するのは残酷なやうな氣がするよ。放任して居いても彼女の聰明さは必ず彼女の心を極く自然に完成さすに違ひない。」

百合江は不思議な氣持でじつと聽いて居た。何と云ふ鋭い批評なのだらう。彼女は阿部の言葉が自分に就いて語つて居るとは思はれない程だつた。しかし阿部の言葉は全部深い眞實を語つて居るやうに思へるのだつた。

若いガルソンがハラハラしながら彼等の所へ百合江の居ることを知らせに行かうとした時彼女は激しく手を振つて制しながら一語も聞き洩らすまいと全身の注意を聽覺に集中して居た。

隣りのボックスの男達が出て行つた後も百合江はそのまゝの姿勢で容易に整理されない複雑な感情を味つて居た。百合江が暫時の後店を出るために立ち上つた時彼女は意外にも阿部が一人隣りのボックスに坐つて居るのを發見した。しかし百合江の驚きよりも阿部のそれの方が遙かに多きかつた。阿部は暫時言葉が出なかつた。百合江は出来るだけ朗らかに微笑んで見せた。

「良いのよ！　ちつとも怒つてやしないのよ。——ほんとうに嬉しかつたわ」

阿部はその瞬間幾分瘦せた百合江のすらりと立つた姿に神々しいものを感じたやうな氣がした。彼は井上の死んだ夜の百合江を思ひ浮べて見た。阿部の百合江に對する妹の愛情がどうかすると戀人の愛情に變り易い危險さを意識するのだつた。彼は北川を思ひ出した。北川が瀬戸内海の故郷に歸る前夜北川は阿部に百合江への愛を打ち明けたのだつた。阿部は必ず君達の爲に努力すると言つて北川を慰めたのだつた。それは阿部にとつて人道的な義侠心よりも彼等各自の異常な心理がより興味が有つたのだつた。

「北川君は歸つて來ましたか？」

「未だですの」

「何かお便りは？」

「いゝえ！　ちつともないの」

百合江は北川のことをそれ以上訊ねられるのが苦痛だつた。

「阿部さん。少し散歩しません？」

「でも身体を可愛いがつた方が良いことはない？。まだ無理でせう」

百合江は自分自身に就いてより以上の事實が知りたい氣持だつた。百合江はその午後毛皮のショールで首を深く埋めて阿部と長い散歩を無理にしたのだつた。

再び百合江には熱のある日が続いた。彼女はなるべくベットに伏せないやうに努めた。熱苦しい一日は彼女の心の中の可愛い思想的煩悶と共に全く彼女から平靜を奪ひ取つた。阿部の言葉が常に百合江の重い頭の中で目まぐるしく廻轉した。彼女は母

の親切が物足りなかつた。彼女は側に死んだ井上が元氣な北川が居て呉れたらどんなに心強いだらうかと空想するのだつた。

百合江は悪夢にうなされる日が多かつた。巨量の液体が何處からともなく奔流となつて滔々と流動する夢とか、斷崖から飛び降りる夢とか、夥しい群集の中に不圖北川を見付けたと思ふと何時の間にか阿部に變つて居たり突然消え失せてしまつたりする夢とかが百合江を苦しめた。

それを彼女は熱氣の所爲にした。しかしそれらの悪夢は現在の彼女の心理状態と有機的な關係を持つて居るやうな氣がするのだつた。

そのやうな焦燥の時間の堆積の中に百合江は次第に北川が好きになつて行くのだつた。それは阿部の言つたやうに僅かな暗示によつて彼女の肉体の内部には始めて成熟した女の心が誕生しつゝあつたゝめではあるまいか。

百合江は激しい嫉妬と不安を自覺するのだつた。彼女は空想の中で赤い着物の女を散々に虐待することによつて享樂を感じるのだつた。彼女には男性とか戀愛とか結婚とか云ふ事實が自分自身をもその中に引きくるめて次第に接近して來たことを知るのでつた。

今百合江は井上に對して申譯けなかつたと思ふと同時に輕るはづみに結婚して居なかつたことをしみじみと幸ひだつたと考へるのだつた。女は冷靜に異性を認識して、その最も愛する人を躊躇せず選べば良いのだと彼女は考へるのだつた。こんなに平凡な眞理にすら頼らないで暗黒の中で手さぐりしながら幻影の男性を求めつゞけて今や愛する北川を失ふかもしれない自分をたまたなく愚かに感じるのだつた。

百合江が北川に手紙を書いたのは彼女の肉体と精神が落ち付いた後だつた。その前夜久し振りに夢も見ないで熟睡した澄みきつた瞳で水色のカーテン越しに何處となく春の用意をした郊外の眩しい風景を飽かず眺めながら百合江は純白のレター・ペーパーを懷しんだ。

彼女はスラスラとペンを走らせることが出來た。彼女はその手紙を彼女好みの純白の封筒に丁寧に折り込むと下女を呼んで母

に氣付かれぬやうに投函させた。そのことは彼女に暫時の安心をもたらした。

午後なると百合江はもう待ち遠しくなつて來るのだつた。彼女はその子供のやうな待ち遠しさを忘れるためにむやみにピアノのキイを叩いたりレコードを廻轉させたりした。娘の肉体の中に奇蹟的な變化の生じたことを知る筈のない南郷夫人は唯娘の病が全快したので喜びはしやいで居るのだと思つて安心するのだつた。

その次の朝も明るい日和だつた。洋風の彼女の寢室には温い太陽の光線が氾濫して居た。その中で彼女はしげしげと自分の成熟した肉体を眺めた。今迄とは全く異つた意味で彼女は自分の髪や胸や腕や脚の美しさに今更のやうに驚きながら愛撫するのだつた。そのことは彼女にふと玲子と聯想させた。

玲子と彼女とは女學校時代のSだつた。玲子は今若い高等學校の教授と結婚して南口で平和に暮して居るのだつた。百合江は嘗つて自分の肉体を愛して呉れた玲子に思ひきり言つてやりたいと思つた。

——オ姉サン！ベビーチャンハ未ダ生レナイノ？ ユリエモ一人前ノ女ニナツタヤウナ氣ガスルノヨ。オ姉サンハ幸福ネ。ダツテ心カラ愛スル男ノ人ガアルンダモノ。ユリエトモ寂シイノヨ。戀スルヤウナ男ノ人ニ未ダ遇ハナカツタノ。

トコロガ近い中戀愛シソウナノ。オ姉サン！許シテ下サルワネ。若シソノ人ト結婚出來タラ、アタシキツトオ姉サンノオ國ノ温泉へ新婚旅行スルワ。ソシテアタシノアノ人ヲ紹介シテアゲルワ。……

その時百合江は彼女の家の方へ坂道を上つて來る北川の姿を發見した。北川の顔が餘りに明るく輝いて居たので彼女は夢中で今書いたばかりの手紙を引き裂いてストープに投げ込むと、す早くコンバクトを取り出して急に鼓動の高まつた心臓を意識しながら白粉を叩きつけるとバジャマのまゝ、北川の巨きな肩に抱き着きたい衝動に驅られてあはたゞしく階段を走り降りるのだつた。その時の彼女には北川の結婚問題のことなんか全く考へる餘裕は無かつたのだつた。……